

教団新報

定価 1部140円(本体133円+共200円)
 予約購読料 1年分 5,000円
 紙代のみ 3,500円
 振替 00140 9 145275
 本紙を購読ご希望の方は、前金を
 そえて、お近くのキリスト教書店
 へお申し込み下さい。
 教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
 169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
 日本キリスト教会館内 電話 03(3202)0546
 FAX 03(3207)3918
 発行人 竹前昇
 編集主筆 竹澤知代志
 印刷所 株式会社きかんし

神は私たちの中に生きて働かれる

新潟県中越地震被災地から



関越自動車道越後川口インターそばの崩落現場

ホームセンターの駐車場で、仮設住宅に入られた近所の方には「つらさ」が出た。住めるところがあるだけでもありがたいと思わなければ、そう話される一方で、なかなか落ち着かない仮設暮らしの苦勞や、待ち受ける生活再建の厳しさが話のあちこちにこぼれ、程度の差はあるものの被災によって負った一人一人の重荷がいかにも重く、そのことを踏まえた上で共になす復興の歩みはこれからが本番なのだという思いを新たにされた。

昨年一〇月三日、新潟県中越地震発生。最大震度7、十日町の最大震度4.6強、中越全域での震度4以上の余震一〇〇回以上。

復興の歩みはこれからが本番

ひとり祈りを捧げる

地震発生当日、出張先の新潟市から帰宅できず小千谷市で車中泊をし、翌四日朝現地で借りた自転車で帰宅した。保育園を併設している教会建物は、ほぼ無傷で建て替えていた。創立記念礼拝と共同墓碑完成式で賑やかなはずだった礼拝堂で、ひとり祈りを捧げる。「必要な知恵と力をください。」

教会さんのボランティア

明けて二五日早朝、早速群馬地区の教職四名が支援に駆けつけてくださった。続いて関東教区、そして新潟地区からも問安に来てくださった。また、ボランティアとして茨城から、救援物資を満載したワゴン車を駆って群馬からも友人らが到着した。離ればなれにな

神は私たちの中に生きて

教会員はほぼ全員が被災し、中でも教会が一番近いご夫妻の家が規模半壊と判定された。遠くに住む家族の説得もあって一度は移住を決断されたが、やっぱりこの町がいいと帰ってこられた。他にも移住を考えた方が数名おられたが、皆帰ってきたり思いとどまったりした。



新井牧師(左端)が借りた自転車

公式判定では一部損壊という判定にしかならなかったが、土壁の家は壁を全部作り直さねばならなくなつた。タイル貼りの風呂場や台所はほぼ全滅した。また、庭の石垣が崩れたというケースや、貸し家が全壊したというケースも。言うまでもないが、家財のダメージは全ての教会員宅で例外はない。

間もなくセンターは関東教区の全面的な支援を受けて、豊かに、そして大胆に活動を展開していった。教会センターの活動を支えてくれるスタッフも与えられ、北海道から沖縄まで、全国各地から駆けつけてくださったボランティアの方々が、近隣に物資を配つたり、十日町市災害ボランティアセンターや川口町ボランティアセンターを通して活動された。遠慮や警戒心から一般ボランティアを頼めないでいた人たちが、「教会さんのボランティアなら」と直接申し込んでこられたケースも少なくなくなった。歩いていると近所の方に呼び止められ、「先生、町内の人たちが、教会さんがよくやってくれてるっ



いやしのピアノコンサート

て言うてらんぞ」と声を掛けてくださる。ボランティアひとりひとりの活躍が目に素晴らしかつたかを物語っている。

一日の終わりに、普段はスーツ姿しか拝見したことがなかった。顔には無精ヒゲ。その笑顔はたまらなく素敵だった。

それでも、全員無事であったことは、幸いと言わずにおれない。むしろ、ショックや避難生活で体調を崩された方は少なからずおられた。でも、今は元氣と明るさを取り戻しつつある。旧約聖書ヨブ記の物語を思い起こす。ヨブを突然襲いはじめた災いの数々。全

た。なぜなら、今この身に起きている出来事は、まぎれもない事実であり、否定しようにも逃れることのできない現実だったから。でも、その時彼は神の声を聞く。受容せざるをえない人生を歩んでいるということをおぼえて、神は決して自分を放つ

た。なぜなら、今この身に起きている出来事は、まぎれもない事実であり、否定しようにも逃れることのできない現実だったから。でも、その時彼は神の声を聞く。受容せざるをえない人生を歩んでいるということをおぼえて、神は決して自分を放つ



豪雪地にある十日町教会

あった。しかし、多くの方のお祈り、そして具体的な支援の業を通して、神は人を通して私たちに関わってくださり、人を通して愛を示してくださり、人を通して支え、慰め、励まし、いやしてくださる方だということを悟らされた。偶然、不思議、あるいは奇跡的、そんな言い方をしたくなるような出来事もたくさんあったが、思い返せばそれは隣人を通して私たちに働きかけてくださる神の御力に他ならない。まさに、神は私たちの中に生きて働かれておられるのだ。

被災地は有名な豪雪地。この冬は、傷んだ家屋をいたわるかのように、早め早めの雪崩り(屋根の雪下ろし)が行われている。しかし、雪の重みに耐えきれず倒壊する家屋や、放置されて埋もれていく家屋もある。除雪事故や落雪の犠牲になった方もおられる。雪は容赦なく被災者の心身を痛めつける。でも、私たちは光を失わない。

善きサマリア人にその名が由来するという災害救援団体埼玉サマリタンは、自分たちを「善い」と思ったのではなく、向こう側を通り過ぎない者でありたいと願った」と証された。このような隣人を通して、神は私たちを支えてくださる。いかなる困難の中にあっても、神から離れなかつた者は、希望の中に神の恵みを見いだしたことを聖書は証している。

(新井 純報
十日町教会牧師)

三宅島伝道所の集い

避難指示解除を目前に

岐路を迎える避難島民の礼拝

礼拝と交わりの場

「やあ今日は」「お元気でしたか」

なもてなしを頂き感謝をし

「こんな挨拶をかわしなが
ら第一回「三宅島伝道所
の集い」が一月一五日の土
曜日、三崎町教会において
開かれた。二〇〇〇年九月
二日の全島民避難以来この
集いを持って今日に至って
いる。今回は二月一日の避
難指示解除を目前にしての
集いだ。

避難当初いくつかの教会
を会場としたが、このと
ころはずっと東京ドーム近
くの三崎町教会を借用して
いる。目下伝道所関係者は
都区内各地の他に神奈川や
埼玉といった広域に居住し
ている。足の便のよい教会
は有難く、またいつも温か

い。司会には伝道所関係者で
受洗した者が当るようにし
ている。
今回は田中正之(六〇)
であった。兄は当初出来る
かどうか心配を表明してい
た。このところよく眠れ
ないからである。兄は食糧
雑貨を扱うスーパーを経営
していた。夫人、高校生を
筆頭に三人の息子さん、母
親の六人暮らしであった。入
居した都営住宅は大そう狭
く二人分の布団で三人が眠
るといふ具合であった。不
慣れた環境・学校生活とい
つこともあって一人の息子
さんが心のバランスをくず
しくリニックに通つことに
なる。

焦りと恐れと悔しさ

の再就職の困難さを身をも
つて感じている。
島にはスーパーの店と住
居が残っている。これまで
何度か一時帰島の際に建物
の片付けに当って来たが物
は散乱しネズミの死体はあ
りで手のつけようがない。
いつそのこと噴火が焼けて
なくなれば世話ないが、な
まじつか残ったものだから
いつまでも建物のことが頭
から吹っ切れない。

費用が要る。返済する力は
ない。かつては三八〇〇人
もいた島民もかなり少なく
なり(現在三二〇〇人)商
売の目途がたない。子供
たちの学校のこともある。
母親喜久姉は体が弱く、今
なお火山ガスの流れる島に
帰ることは困難なことであ
ったが昨年九月帰島を果す
ことなく天に召された。い
つもここにこしたよいお母
さんであった。

今、避難解除を目前にし
て兄の心は揺れている。焦
りと恐れと悔しさ。を覚え
ている。帰りたくても帰れ
ない。こちらにいても仕事
がない。一体どうすればい
いんだ。神さま何とかして
下さい。

このようなことで司会が
出来るか危ぶまれた。しか
し兄は落ち着いた声で司会を
始めた。これまでのこの集
いを通してどんなに慰め励
まされたことか。帰島する
者、残る者に
神の導きがあ
るように。私
たちを憐れん
で下さい」と
兄は祈りを捧
げた。

私たちは兄
の上に主の守
りと支えを祈
らざるを得な
い。彼の弱さ
を通してキリ
ストの力が宿
るように祈



司会をする田中正之兄



2005年1月5日 於 三崎町教会 (最前列左端 著者)

互いの近況を語り合う

第二コリント二九
今回の説教は小岩教会・
井上警牧師に担当頂いた。
師は第一コリント一〇
以下に基づき「主にある一
致の勧め」と題して語った。
教会には主のようなものが
いてはいけない。人間崇拜
の集団であってはならずた
だ主キリストと父なる神を
のみ崇むべきこと、礼拝を
大切にして真の救いを伝え
なければならないことである。

カタコンベの壁を思わせ
る小礼拝堂での礼拝を恵み
の内に終ると三階に移動
し昼食をとりながら互いの
近況を語り合う。第二部交
わり」の今回の司会は救援
委員会委員であり東支区長
の米倉美佐男牧師が当つ
た。以下にその要旨を記し
てみる……

鎌川文字姉は一番古い会
員である。福島県で信仰に
支えられ夫が島の人なので

面島には帰らず高齢者伝道
を志している。
片寄一輝兄は整体師でこ
ちらでもその仕事を続けて
いる。当地でバイクに乗っ
ていて重傷を負うがやがて
信仰に導かれた。妻の玲子
姉そして両親と共に残る予
定。玲子姉は美容院を営ん
でいた。やはりこちらで受
洗。二人とも黒原町教会
員。

田中正之兄については先
に述べたが妻の恵美姉が共
に出席。姉は週二回都立の
看護学校の事務に当っている。
二人とも神戸・山手教
会員。

佐々木美代子姉は片方の
足を不自由に行っているが
でも元気がいい。求道中。
静かな島・三宅島への帰島
を心待ちにしている。夫は
漁師さん。

松尾純子姉は主人が三宅
高校校長で島にいた時に噴
火にあった。こちらに来て
も伝道所を支えている。青
梅教会員。

前回見えたが今回欠席の
赤羽美江姉は島では養鶏を
営んでいた。こちらでは福
祉施設に勤務。当地で信仰
に導かれた。帰島を待たし
く思っている。与野キリス
ト教会員。

同じく、今回欠席の井上
けい子姉はひと足先に島に
渡り電気関係の仕事をする
夫を助け、島民の帰島の準
備に当っている。求道中。
以上伝道所関係者一〇人
の様子を伝えた。当日は他
に救援委員七人、一般有志
参加者五人、計二〇人であ
った。これまで大体二〇人
前後の集まりで来ている。

今、伝道所は岐路を迎え
ている。帰島組と残留組と
に分かれたからだ。残る人
は本当は帰りたい。嘘の三
宅島”である。しかし帰れ
ない事情がある。一方の帰
る人も意気揚々という訳に
はいかない。ガスマスクを
持って島におり立ち生活を
する。決死の覚悟が必要。
残る人・帰る人双方への心
配りが求められる。

現在島には伝道所の建物
はない。一九八三年の噴火
の際に焼失し未だその地は
危険地域に指定されてい
る。噴火直前まではこちら
から牧師が交替で赴き場所
を借りて集いを行っていた。
今後そのような形に
なるか検討中である。

それにしては何で三宅島
の人々がこんなにも長く苦
しまなくてはならないのか。
この間はこれまで様々
の自然災害にあった人々に
ついても言えることである
う。神がよい意志をもって
世界・人間を創造しこれを
保持しているというのにこ
の大きな悲しみはどう受け
とめたらよいか。

私は神のメッセージとし
て次のように聞く。神の
大きな力を知り人間の小さ
さを悟り生死を神に委ねて
生きよ。人よ、争い・戦
争事を止めて助け合って生
きよ。人間の欲望が災害
を増幅している面があるこ
とに気付く。被災者は災
害を免れた人達に代って苦
しんでいる。苦難を通して
神は救いに導いておられ
る……



噴火の激しかった頃

何とかもつ少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

何となく少しゆとりの
ある住宅が欲しいというこ
とで村役場・都と折衝。よ
うやく別の都営住宅に移り
住むことが出来た。一方、
兄も遊んではいられない。
職さがしのために八〇〇ワ
ーク通いを始める。年齢不
問ということで申し込むが
ことごとく不採用。中高年

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

共有課題を担う 教師委員会

第34総会 期第一回教師委員会が一月二日午後一時三十分から七時まで教団会議室において開催された。

今委員会は、第34回総会で委員会の減員が可決されたことを受けて二名減の委員が招集された。委員は、軽達昇（招集者）、久山庫平、小宮山剛、田中かおる、松井睦、宮本義弘、吉武二郎の七名であった。

最初に委員会組織が行われ、委員長に軽達昇、書記に宮本義弘が選出された。続いて、前委員会からの申し送り事項が確認され、教師委員会が取り扱う課題が新委員会においても共有された。しかし、教師委員会が取り扱う事項は、教師養成、育成、研修、人事交流、戒規に関するものであるが、その具体的項目は二十項目以上に亘る。前委員会でも多くの課題が取り扱ったことすらできないでいた現状を受け止めざるを得ず、今委員会の課題の一つとなった。途中で竹前昇総幹事の挨拶を受け、経費削減などの課題を受け止めたいとの申し出があった。

この開催希望が過去の参加者から寄せられていたが、主に経費面からの理由によって今回もこれまでと同会場に決定することとなった。主題は、「教団の教師として宣教をともに担う」として、今回の参加者は百名近くになると予想されている。内容に関しては細部まで煮詰めることができず、次回委員会が発行することが確認された。（宮本義弘報）

「部落解放の祈りの日」運動展開

部落解放センター運営委員会

第34総会期第一回部落解放センター運営委員会が教団会議室にて一月二日～三日開催された。前教団部落解放センター主事の角樋平一さんが昨年九月二六日に逝去されたから最初の運営委員会ということもあり、はじめに皆で角樋さんを偲びつつ開会礼拝の時をもった。「部落解放：人間解放」のために全力を捧げ尽くされた角樋さんの遺志を継いでゆこうとする運営委員会の仲間たちにとって、新たな気持ちに立たされた委員会の始まりとなった。

委員会で、教団部落解放基本方針、具体化の一つとして前総会期に決議した「部落解放の祈りの日」運動についての報告が各教区よりなされた。七月第二主日を「部落解放の祈りの日」として覚えながら様々な部落解放への取り組みがなされたこと、そして何よりも主日礼拝の中で部落解放を願う祈りがさげられたこと等を聞いた。今年も七月第二主日を「部落解放の祈りの日」と定めて、昨年以上の多くの教会・伝道所でこの運動が展開されることを願っている。

また昨年一〇月の教団総会での解放劇上演が好評であったことが報告されたが、今年の夏には同劇が関西地区を会場にして再上演されることが決められた。同宗連（同和問題に取り組み宗教教団連帯会議）より、二〇〇五～〇八年に副議長教団を、二〇〇九～一〇年には議長教団を引き受けてほしいとの依頼があり、この件についても協議した。経済的にも人的にも大変厳しいものがあるが、前向きに対処してゆくことを決議した。

更に二〇〇四年度活動募金の中間報告がなされたが、目標額達成には至らず、「解放センター活動献金」をお願い、文を各教区へ送付することとした。全国から更なる協力を願う次第である。

なお、今総会期の運営委員長には、東岡山治が留任、活動委員長に谷本一広、書記に早瀬和人が選任され、これを確認、合わせて総幹事との話し合いの中で、今後新たに嘱託職員を採用することも確認している。（早瀬和人報）



部落解放センター運営委員会

千葉支区の課題と楽しみ

内田 汎

千葉支区には六二の教会・伝道所があります。大変乱暴で大雑把なくくり方ですが、以下のようにその開設状況をまとめることができるかもしれません。

日本基督教団成立までに十八の教会が設立されてきました。ちなみに一八七九年に千葉教会（創立一五周年）が開設され、創立百年を越える教会が十一あります。第二次大戦後、一九五〇・六〇年代に二〇の教会が開設されました。

教区コラム

東総分区、北総分区の農漁村です。七〇・八〇年代に二の教会が開設されました。高度成長期の千葉県に呼応するように総武線、常磐線沿線、千葉内房分区、東葛分区に支区全体の伝道戦略が求められています。

ここにもう一つ新しい動きが起りました。一九九七年南房伝道所が開設され、その後長浦伝道所（〇二年）、君津伝道所（〇三年）が開設され、〇四年度内にはもう三つの伝道所の開設申請、申請準備が進められています。（東京教区千葉支区長）

インドの宣教と奉仕のために

三浦照男宣教師派遣式

三浦照男宣教師派遣式が二月二七日に教団会議室で山北宣久議長の説教、上田博子宣教師の式詞により執り行われた。

アラハバード農業大学継続教育学部の学部長として一〇月一日付で、すでに赴任しており、一時帰国中に派遣式が行われた。

前任者の牧野一穂、由紀子宣教師夫妻が九月三〇日に四〇余年に亘る宣教の業から退任した後を受けての赴任である。三浦氏は、フイリン国立大学ロスパニヨス校で農業教育を、また米国立州立大学大学院で社会学を修め、アジアの副校長等を歴任している。現在インドでは、政府の方針により、キリスト教の宣教師という資格では事実上入国できない状態にあり、三浦氏の働きは北米やヨーロッパの教会からも注目されている。

派遣式では、山北議長がインドの教会がインドの宣教と奉仕のために最も必要としている働き手を、教団が送り出すことの出来る幸いを述べた。

派遣式後にもたれた茶話会では田村博後援会長（田園調布教会牧師）を初めとする後援会メンバーが三浦宣教師を支援し続ける決意を語った。後援会活動はこの宣教の業に不可欠であり、さらに必要性が高まると思われる。

三浦氏は、牧野夫妻の後任として牧野夫妻と同じ働きをするのは、妻が日本に残ることもあり困難なことであるが、自らの力の限り与えられた勤めを果たしたい、と語った。

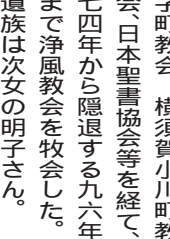
三浦宣教師の働きが祝福されるよう、祈りたい。

消息

宮内俊三氏（隠退教師）



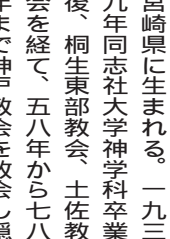
十一月十二日、逝去。九七歳。大阪府に生まれる。一九三二年日本神学校を卒業後、岩沼教会、小田原十字町教会、横須賀小川町教会、日本聖書協会等を経て、七四年から隠退する九六年まで浄風教会を牧会した。遺族は次女の明子さん。



児玉浩次郎氏（隠退教師）



宮崎崇生氏（隠退教師）



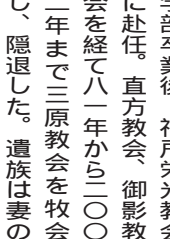
黒田英彦氏（隠退教師）



黒田英彦氏（隠退教師）



黒田英彦氏（隠退教師）



黒田英彦氏（隠退教師）

事務局報

補教師登録

中井利洋二〇〇四・一・二一受允

本間一秀二〇〇四・一・二七受允

岩見誠司 渚

網中彰子二〇〇四・一・二六受允

柳瀬 聡 大下正人

堀本 淳二〇〇四・一・二一受允

小島仰太二〇〇四・一・二四受允

正教師登録

芳賀 恵二〇〇四・一・二三受按

岡村紀子二〇〇四・一・二七受按

長山 道二〇〇四・一・二五受按

川崎公平 福島義也

野口幸生 米田芳生

宇野 緑 田邊優子

西脇正之 荒木かおり

（二〇〇四・一・二六受按）

上垣旅人 尾島信之

武岡洋治 鈴木淳一

（二〇〇四・一・二七受按）

大野高志 松永政和

渡邊大修 矢澤新一郎

島田敬子 山田康博

楠原博行 楠原彰子

黄昌性二〇〇四・一・二二受按

岨下健一（二〇〇四・一・二四受按）

教師異動

神山 賢代 芳賀正治

静岡 賢代 長倉寛代子

島田 賢代 桑 渚

新井 賢代 森 言一郎

松山古町 就兼 森 言一郎

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

就担 三野慶仁

牧師のパートナー

「みちのくは花盛りなり、君ら得て」と奥羽教区に温かく迎えられた。故浅野順一先生のご紹介で、地震災津波後の港町大船渡で、開拓伝道に勤む牧師に嫁いだ。

故荒井源三郎先生は、地方の伝道は台所教会、家内工業である。九九パーセントは夫人の力による。しかし牧師の一を加えて百パーセントになることを。中山年道先生からは、「牧師夫人程、悪魔になるか、天使になるかの選択を日々求められる人はない」と大先輩の伝道者から頂いた心構えを胸に秘めて。

開拓伝道の幻を共にして、新居は礼拝堂であり集会所であった。教会学校の生徒は溢れ、若者達は深夜まで、人生、神を語った。伝道所が生まれた事を知った人々が、牧師を訪ね、出入の多い日々を送った。

「一匹の魚と五つのパン」の奇蹟、スリルに満ちて、オサンドンに専心した。いろいろな補いの必要から英語塾にも力を注いだ。土地購入、会堂建築へと、ブライバ

①

①

シーが限られる激しい生活、チャレンジ的な営みが続いた。パイオニアの精神に鼓舞された若者達との出会いは、「あなた達の勲章よ」と煽られて、その気になっていた。

しかし、十年の開拓伝道に疲れ、北東北、盛岡に移り、百年余の歴史ある内丸教会に招聘された。十二部屋もある文化財的西洋館、ネズミやゴキブリが走る空室は、勿体ないと、青年達を受け入れ、共同生活が始まった。下宿人と共に思春期の一人息子も、豊かに伸びやかに育てられた。この結果に、神様のユーモアに驚いている。

②

②

健やかな時も病める時も

中条 鈴枝
(盛岡市・内丸教会員)



中条鈴枝・中条和哉さん夫妻 (バンコクにて)

羊飼いの食卓では、朝拝が守られ学生寮さながらの寮母の台所牧会、活気に満ちてい

た。地域の人々と共に用いられ民生委員も務めつつ、韓国の方の日本帰化手続きをお手伝いしながら、隣国、アジアへの関心、愛に目覚めさせて頂いた。牧師館のお客様と語り、静聴しながら、お茶を供し、お宿もした。「急須」の役割が果たせるように願

いながら、主人の胃腸手術、

③

③

④

④

⑤

⑤



十日市教会礼拝堂での祈禱会

⑥

⑥

⑦

⑦

⑧

⑧

⑨

⑨

⑩

⑩

ボランティア活動報告 西東京

第34回教団総会の折に、関東教区から「新潟県中越地震被災支援センター」を立ち上げたので、各教区に献金とボランティアの協力の要請がありました。西東京教区では、関東教区からの協力の要請をそのまま教区内の諸教会に伝えました。

しかしその後間もなく、「西東京でまとまってボランティアを派遣した方がより実際の協力ができるのではないか」という意見がだされ、新潟県中越地震被災支援委員会を教区内に作り具体的な検討に入りました。

東京教区西支区時代のことになりませんが、阪神・淡路大地震の時に、二ヶ月近くボランティアを送ったことがあり、その当時参加した人々からも意見を聞き、関東教区及び十日町教会とも連絡を取りつつ計画を進め、十一月の第二週から十日町教会のボランティアセンターにウィークデイを中心に派遣することになりました。

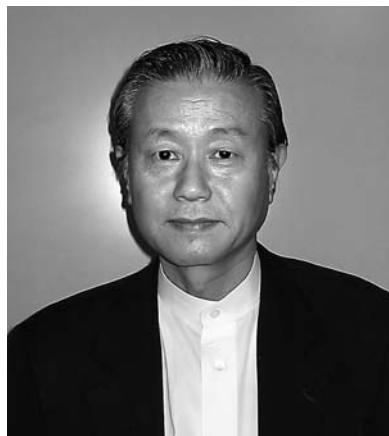
教区諸教会に呼びかけたところ、教職・信徒合わせて十五名が応募してくださり、またボランティアを支えるための献金もたくさん寄せられました。

奉仕の活動は毎日必要とされることを行なうので、様ではなく、他のボランティアの方々と一緒にいろいろなことを行いましたが、この奉仕を通じて、現地の方々と一緒に奉仕することができたこと、他教区からのボランティアとの共同作業ができたこと、時には他の宗教団体と一緒に作業する機会もあり、それらも貴重な出会いの経験となりました。

ひととき

堀江悦男さん

恵まれた道を行く 隻腕の設計技師



1944年生まれ。横浜指路教会員。堀江設計事務所代表。十年ほど前から、教会堂建築の設計も手がける。

不慮の事故で利き腕を失って三〇年余り。人に知れない苦労も当然あるが、大きな障害や問題もなく、ただ恵まれた道を一所懸命に歩んできた」と、隻腕の設計技師堀江悦男さんは振り返る。

幼い頃、絵描きになるのが夢だった。しかし、周囲の人々の助言もあり、より現実的で絵描きの賜物も活かせる建築設計技師への道を選んだ。画家への夢と賜物は、創造的なデザイン・設計に存分に生かされ、やがて大きな建築設計を担当する機会が巡ってきた。

さらなるステップへのチャンスと、打ち込むのが当然だった。積み重なった過労は、いつしか限界を超えていた。朝の出勤時、

不確かだったが神への祈りをしていた。

建築関係の仕事はシビアな取引も多い。ルーズさへの誘惑もある。しかし、神の真実の前に生かされているかぎり、いつも懸念に信実であらうと努めている。

直に住宅の設計には、個人の具体的な生活に立ち入ることにもなる。そこで新しい生活が築かれることを思うと、家庭のあり方、生き方も問われる。悦男という名は、子供の顔を、見事に応じた父が残してくれた。いつとも書けない。どんなことにも感謝しない。の言葉をどんな状況でも言えるように生きたいと願っている。

お知らせ

十日町教会の新井純牧師ご夫妻を初め十日町教会の方々は、牧師館が被災したにも関わらず、ボランティア受入のためにいろいろとご配慮してくださいました。

また、ボランティア受入のコーディネーターとして献身的に奉仕してください北畠友武・千原創両牧師のお働きでスムーズに奉仕することができました。この場を借りて感謝したいと思います。

(吉岡光人報)

★神学校新卒者工芸ユニット 3 0 5 4 4

★宣教師公募
任地「カナダ・フレザバレー」日系人教会/任期「2005年6月から3年間/条件」ハーフタイム(週20時間)/応募締切「3月10日/面接」3月18日/その内者/要申込み・締切「2月末日/主催・問合せ」3 2 0 3 0 5 4 4

★NCC教育部/3 2 0 3 0 7 3 1 / m -mail(nccj-education@cello.ocn.ne.jp)

★映画「風の舞」(聞を拓く光の詩、ビデオ(59分)化される
ハンセン病を病んだ過酷な間の中で、生きることに意味を問い続けてきた詩人・塔和子のドキュメンタリー映画。監督・宮崎信恵、朗読・吉永小百合/価格「六万円(送料別途)/販売」共同映画株式会社、3 4 6 3 8 2 4 5、FAX 0 3 3 4 7 6 3 7 5 7 /問合せ「社団法人好善社」0 3 3 7 1 2 3 8 4